北星学園大学社会福祉学部北星論集第51号（2014年３月）・抜刷

幼児の対人葛藤場面における敵意の認知と解決方略

柴　田　利　男

幼児の対人葛藤場面における敵意の認知と解決方略

柴　田　利　男

目　次

Ⅰ．問題
Ⅱ．方法
Ⅲ．結果と考察
引用文献

Ⅰ．問　題

幼児期は子どもの社会性の発達において極めて重要な時期であり，この時期に子どもは周囲の環境を通して認知や言語の諸側面を著しく発達させるとともに，他者とのやりとりは豊かになっていく（子安，1997）。幼稚園や保育所に通うようになると，それまでの家庭での両親やきょうだいとの関係とは異なる仲間同士の関係性が出現し，その中で，遊び道具の取り合いなどの対人葛藤場面において，適切な対処をしていかなければならなくなる（子安・鈴木・安，2004）。このような他者との効果的な相互交渉を行うために必要となるのが社会的問題解決（SPS: Social Problem Solving）能力である。SPSとは“社会的相互交渉を通しての人格的目標の達成の過程”と定義されており（東・野辺地，1992），そのSPS研究の先駆的役割を果たしたShure, Spivack & Jaeger（1971）は，仮設的に設定された社会的場面に対し，解決方略をできるだけ引き出させるという“仮設―応答テスト”（PISP: Preschool Interpersonal Problem Solving Test）を考案した。さらにPettit, Dodge & Brown（1988）はPISPを発展させたSPST（Social Problem Solving Test）を用い検討したところ，幼児のSPS能力の量的・質的個人差は社会的コンピテンス（social competence）と関連していることが明らかになった。

社会的コンピテンスという用語は，社会的スキル（Social skill）や社会的認知的コンピテンス（social-cognitive competence）と同義に用いられたり，社会性の発達にかかわる諸要因の包括的用語として用いられる（斎藤・木下・朝生，1986）。柴田（1993）は，Duck（1989），濱口・新井（1991）らの定義を検討した結果から，社会的コンピテンスには第１に行動のレパートリーとしての社会的スキル，第２に内発的動機づけと社会的認知に基づく対人行動のプロセス，第３に効力感および新たな対人行動への動機づけ，という３つの側面が含まれる理論的モデルを提案している。

対人葛藤場面において，ある出来事が悪意を持って引き起こされたことか，それとも偶然発生したことか，という相手の意図を正しく理解することが，適切なSPS方略すなわち社会的問題解決のための行動選択と遂行につながると考えられる。丸山（1999）は葛藤相手の敵意の有無と社会的問題解決方略の関係を調べた結果，４・５・６歳児のいずれも相手の敵意の有無を認知でき，６歳児では相手に敵意がある場合は言語的自己主張方略をとることが多いのに対して，敵意がない場合には「なにもしない」というような消極的方略をとることが多いことが示されている。ま

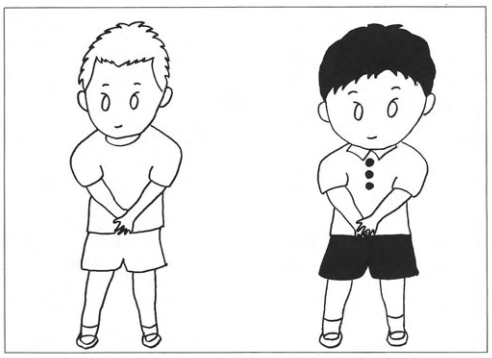
キーワード：敵意の認知，社会的問題解決方略，幼児

た柴田（2004）は，相手の加害行為が敵意による行為かどうか，幼児の意図（敵意）の認知について検討を行った。その結果，年中児は年長児に比べて加害者に敵意を帰属する傾向が高いことが示された。

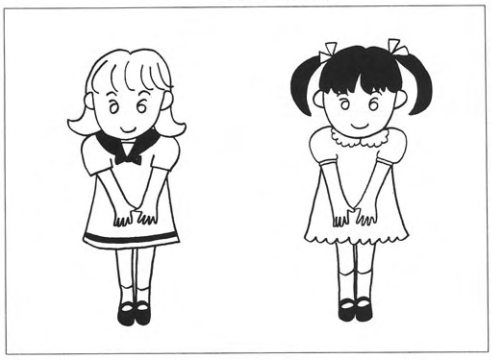
以上のような先行研究から，相手に敵意を認知するか否かによって，その後のSPS方略が異なることがわかる。しかしながら幼児は何歳くらいから，またどのような状況において相手の敵意を認知しやすいのかは明らかではない。

SPS方略に影響を及ぼす社会的認知の要因としては，他に様々なものが考えられるが，柴田（1999）は自己に被害を与える相手が友人か他人かという対人情報を幼児に与え，SPS方略やそれを導き出すプロセスの違いについて検討している。その結果，年中児は他人条件で一貫した予期が出来ず友人条件で関係促進的な予期をする傾向があること，年長児は他人条件で関係促進的な予期をする傾向があったが友人条件では一貫した予期が出来ない傾向があること，を報告している。この理由として，子どもは過去の対人経験を基準にして考えているため，年中児は相手が他人の時には一貫した予期は出来ないが，逆に経験を積んだ年長児は友人から被害を受けるという経験のない事態に混乱して一貫した反応が出来なくなるのではないか，と述べている。自己に被害を与える相手がよく知っている人物か，あるいは全く知らない人物であるかという対人情報の違いは，敵意の認知やSPS方略に大きな影響を及ぼすものと思われる。

以上の先行研究をふまえ，本研究では対人葛藤場面における幼児の敵意の認知とSPS方略の選択に関して，自己に被害を与える人物の情報（友人または他人）の効果と，その年齢差について検討する。



男児紹介場面図版



女児紹介場面図版

図１　主人公紹介図版

Ⅱ．方　法

１．面接対象児

札幌市内のＳ幼稚園に通う年長組の男児14名，女児18名，年中組の男児８名，女児19名，計59名を対象に面接調査を行った。

２．社会的認知の測定

（１）図版

男女別の主人公紹介図版（図１参照）および砂場場面，絵の持参場面，廊下場面の３場面，各３枚構成の男女別の図版（図２，３，４参照）18枚を用意した。砂場場面は，砂場で遊んでいる時に砂をかけられる場面，絵の持参場面は，自分の描いた絵を相手に踏まれてしまう場面，廊下場面は，廊下を歩いていたら相手が背後からぶつかり転んでしまう場面である。

また感情認知の測定のため，怒り，悲しみ，無表情，喜びの４つの感情を表す表情図（図５参照）を用意した。

（２）対人条件

図版に登場する加害者を友人とする友人条件，知らない子とする他人条件を設定し対象

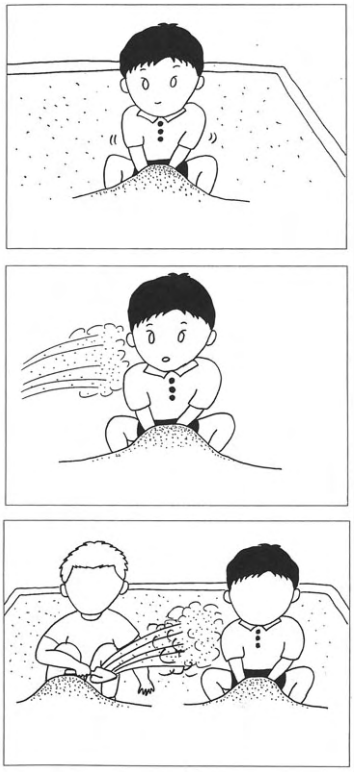


図２　男児砂場場面図版

図３　女児絵の持参場面図版

図４　男児廊下場面図版

児をランダムに振り分けた。

（3）質問内容

①敵意の認知：「この子は，○○くん（ちゃん）に，わざと意地悪をしたのかな？」と尋ね敵意の有無を答えてもらった。

②相手の感情の認知：「この時，お友達（知らない子）はどんなお顔だったと思う？この中から，お顔を選んで下さい。」と尋ね，表情図を示し表情を選択させた。同時に「これは，どんな気持ちですか？」と質問し言語反応を求めた。

③自分の感情認知：「この時，○○くん（ちゃん）はどんなお顔だったと思う？この中から選んで下さい。」と表情図から選択させ，「これは，どんな気持ちですか？」と言語的反応を求めた。

④SPS方略：「この時，○○くん（ちゃん）はどうすると思いますか？」と尋ねた。対象児が回答したら，「他にはどうしますか？」

図５　表情図版

と解決方略に関する質問を繰り返した。「わからない」と答えたり，同じ応答を３度以上反復したり，長時間無反応の場合は，「他にはもう，ありませんか？」と確認した上で，次の質問に移った。

⑤解決方略に対する相手の対応予測：「○○くん（ちゃん）が＊＊した後，お友達（知らない子）はどうすると思いますか？」と尋ねた。「わからない」と答えたり，同じ応答を３度以上反復したり，長時間無反応の場合は，「他にはもう，ありませんか？」と確認した上で質問を打ち切った。

（4）手続き

主人公紹介場面を面接対象児の性別に合わせ提示し，主人公（黒髪の人物）に対象児と同じ名前を付けた。加害者（白髪の人物）に関しては，友人条件の場合は「お友達」，他人条件の場合は「知らない子」と紹介した。続いて各場面の図版を提示しながらストーリーを説明した。たとえば砂場場面における友人条件では以下の通りである。「（１枚目）○○くん（ちゃん）とお友達が砂場で遊んでいました。（２枚目）すると，突然，○○くん（ちゃん）の横から砂がかかってきました。（３枚目）それは，お友達が砂を掘っていて，その砂が○○くん（ちゃん）にかかったのでした。」このように各ストーリーにおいて，加害者の意図（敵意）は明確には示さなかった。他人条件では「お友達」の部分を「知らない子」に変えて説明した。ストーリーの説明後，先述した５つの質問を行った。なお３場面の提示順序はランダムに設定された。

３．回答のカテゴリー分類

面接によって得られた言語反応について場面ごとにカテゴリー分類を行った。

自他の感情認知（質問②および③）については，喜び，怒り，悲しみ，無表情，困惑，ネガティブ感情, SPS方略（④）については，反社会的解決，向社会的解決，主張的解決，第三者介入解決，消極的解決，泣く，わからない，方略なし，対応予測（⑤）については，自己中心的予期，関係促進的予期，物理的変化の予期，悪い結果の予期，不明，何もしない，に分類した。

Ⅲ．結果と考察

砂場・絵の持参・廊下の各場面間に偏りがみられなかったため，３場面のそれぞれを1ケースとみなして分析を行った。

各指標についての年齢×対人条件のクロス集計表，また年齢・条件ごとの指標間のクロス集計表を作成した。それぞれのクロス表に対しては，セルの人数によって，x^2検定または，Fisherの直接確率計算を行った。

１．年齢×対人条件　質問項目ごとの分析

（1）敵意の認知

年長児は友人条件の場合，敵意なしと認知した者が多く，他人条件の場合は，敵意ありと認知した者が多かった。一方で年中児の場合は，友人条件・他人条件ともに敵意ありと認知した者が多かった。結果を表１に示す。

友人条件の場合，年長児の想定する「お友達」は仲のいい友人であり，敵意を持ってわざと意地悪なことなどしない，と考える者が多いようである。しかし相手が他人である時では，人物像が明確化されないために，敵意があると考えた子どもが多かったのではないだろうか。

（2）相手の感情の認知

表情選択に有意な偏りはみられなかった。

年長児・年中児ともに，友人条件で怒りが多く選択されたのに対し，他人条件では喜びが多く選択されている。すなわち相手の行為をおふざけと捉える者と敵意に基づくものと捉える者が相半ばすると考えられる。

表１　学年×敵意の認知のクロス集計表

友人条件	敵意なし	敵意あり
年 長	28	16
年 中	15	21
合 計	43	37

$p = .071$

他人条件	敵意なし	敵意あり
年 長	20	30
年 中	13	32
合 計	33	62

$p = .287$

（3）自分の感情の認知

有意な偏りは見られなかったが，一貫して悲しみの選択が多かった。年中児については，他人条件では怒りの選択が多く，友人条件では喜びの選択が比較的多かった。怒りは攻撃に対する反応，喜びはおふざけ行動に対する反応と考えられる。

（4）SPS方略

有意な偏りはみられなかった。年齢に関わらず両条件で主張的解決方略の選択が多い。また消極的解決方略の選択も多く，この２つの方略だけで全体の66.10％を占めている。

向社会的解決を選択したのは友人条件の年中のみであった。

（5）相手の対応予測

有意な偏りはみられなかった。両条件において関係促進的予期が最も多い。

関係促進的予期以外の選択は，友人条件では不明と何もしない予期に，ばらついているのに対し，他人条件においては，年長児では悪い結果の予期，年中児では不明が比較的多かった（表２参照）。

２．敵意の認知と他の指標との関連

（1）敵意の認知×相手の感情

年長児では，友人条件でのみ有意な偏りがみられ（$x^2=17.93$，$p<.01$），敵意なしと認知した場合は，喜びの選択が最も多い。敵意なしの場合，友人条件で悲しみの選択をした者は21.43％だったのに対し，他人条件では5.00％であった。また敵意ありと認知した場合は，怒りの選択が多くなる。敵意ありの場合，他人条件で20.00％が選択した無表情が，友人条件では全く選択されていなかった。

年中児では有意な偏りは見られなかった。敵意なしの場合，多く選択された感情は，友人条件では無表情，他人条件では喜びであった。敵意ありの場合，多く選択された感情は，友人条件では怒り，他人条件では喜びであった。

敵意がないと認知した時の友人の感情認知は，年中児では不明瞭だが，年長児になると推測可能になるようである。一方，敵意があると認知した時の他人の感情認知は，年中児では友人条件と同じく喜びを選択するものが多いが，年長児は判断しかねながらも怒りを選択するケースが多い。年長児の方が，敵意がないのに危害を加える理由，また知らない人が危害を加える理由などを考慮して相手の感情を判断する能力が優れていることが示唆される。

（2）敵意の認知×自分の感情

年長児では，有意な偏りは見られず，どの

表２　学年×結果予期のクロス集計表

友人条件

	関係促進	自己中心	悪い結果	不 明	何もしない
年 長	27	1	0	12	5
年 中	23	2	2	3	6
合 計	50	3	2	15	11

$p=.124$

他人条件

	関係促進	自己中心	悪い結果	不 明	何もしない
年 長	29	0	10	4	8
年 中	18	1	7	12	7
合 計	47	1	17	16	15

$p=.098$

条件でも悲しみの選択が多かった。有意ではないが敵意ありの場合，怒りの選択が友人条件では6.25％だったのに対し，他人条件では16.67％と比較的多くなっていた。

年中児では友人条件でのみ有意な偏りがみられた（$x^2=12.00$，$p<.05$）。全体的に悲しみ，ネガティブの選択が多かったが，友人条件の敵意なしにおいては喜びの選択の多さが目立つ。敵意があるというネガティブな認識をした時，年長では友人と他人では違った感情を抱く，すなわち友人を他人と区別し個別化していると言えるのではないだろうか。

（3）敵意の認知×SPS方略

年長児では，友人条件でのみ有意な偏りがみられた（$x^2=14.10$，$p<.05$）。全体として主張的解決方略の選択が多いが，友人条件の敵意ありにおいては不明の選択が最も多い。これは敵意ありと認知したが，相手が友人であるが故に，どのような行動を取ればいいのか分らなくなったと解釈できる。有意ではないが他人条件の敵意ありでは，その他の条件でみられなかった泣く方略が選択されていた。相手が見知らぬ相手であるため，方略を考える事ができず，「泣く」という自らの行動のみを答えた子どもがいたのかもしれない。

年中児では有意な偏りは見られなかった。全体を通して，主張的方略と消極的方略の選択が一貫して多い。両条件ともに，敵意なしの場合で反社会的方略と第三者介入方略の選択は見られなかったのに対し，敵意ありの場合では少数ながら選択されていた。また，友人条件においてのみ向社会的方略の選択があった。

（4）SPS方略×相手の対応予測

年長児・年中児ともに友人条件では関係促進的予期が多い（年長：$x^2=75.18$，$p<.001$，年中：$x^2=47.72$，$p<.05$）が，他人条件では悪い結果の予期が増加する（年長：$x^2=73.41$，$p<.001$，年中：$x^2=56.07$，$p<.001$）。以上から，年長児・年中児ともに相手が友人の場合では，関係促進的予期をするが，相手が他人の場合では悪い結果を予想するようになるということが言える。

3．まとめ

年長児では，相手が友人の時には敵意がないと判断し，相手が他人の時には敵意があると判断する者が多く，年中児では，友人条件・他人条件ともに敵意があると認知する者が多かった。このことから年長児では対人情報が敵意の認知に影響を与えることが示された。また自分の感情認知については，敵意があると認知した時，相手が他人の場合では友人の場合に比べ，怒りを感じる者が多かったことから，友人と他人に対して感情の抱き方に違いがある可能性が考えられる。これは先行研究でも言われている通り，友人と他人を区別し，友人を特別な存在として認識し差別化を行っていると考えられるであろう。さらにSPS方略と対応予測の関連をみると，主張的な方略に対し，友人の場合ではプラスの結果を予期し，他人の場合ではマイナスの結果を予期するという傾向がみられた。

年齢差に関しては，年齢が上がるにつれて，より相手の感情を推測し理解することが出来るようになり，状況に応じて相手の行動理由を考慮することができるようになると言える。また相手が他人の場合，敵意があれば主張的な方略を図り，敵意がなければ解決に消極的になる，という傾向を徐々に形成していくと考えられる。この過程において，友人を特別な存在として他人と差別化することが重要な意味を持つと考えることが出来る。

今回の面接調査において，SPS方略と対応予測の質問に対して，敵意の認知や自他の感情認知に関わらず「ごめんねする→いいよって言う」という回答が目立って多かったように思われる。このような反応パターンは，家庭や幼稚園におけるしつけ・教育を通じて，対人葛藤場面において有効なパターンとしてステレオタイプ化された一種のマニュアルの

ような存在になっているという可能性が考えられる。

引用文献

東　敦子・野辺地正之　1992　幼児の社会的問題解決能力に関する発達的研究―けんか及び援助状況の解決と社会的コンピテンス―教育心理学研究, 40, 64-72.

Duck,s. 1989 Socially competent communication and relationship development. In B. H. Schneider, G. Attili, J. Nadel, & R. P. Weissberg（Eds.）, Social competence in developmental perspective. London: Kluwer Academic Publishers. Pp. 91-106.

濱口佳和・新井邦二郎　1991　児童の社会的コンピテンスへの接近法についての考察―場面特殊的―内潜的過程アプローチの提唱　筑波大学心理学研究, 13, 185-202.

子安増生　1997　子どもが理解するとき　金子書房

子安増生・鈴木亜由美・安　寧　2004　幼児期における他者の意図理解と社会的問題解決能力の発達―「心の理論」との関連から―　発達心理学, 15（3), 292-301.

丸山（山本）愛子　1999　対人葛藤場面における幼児の社会的認知と社会的問題解決方略に関する発達的研究　教育心理学研究, 47, 451-461.

Petti, G. s., Dodge, K. A., & Brown, M. M. 1988 Early family experiences, social problem solving patterns, and children's social competence. Child Development, 59, 107-120.

斎藤こずえ・木下芳子・朝生あけみ　1986 仲間関係の発達　無藤　隆・内田伸子・斎藤こずえ（編）　子ども時代を豊かに　学文社 Pp.59-111.

柴田利男　1993　社会的コンピテンスの諸測度間の相互関連性とその個人差　発達心理学研究, 4, 60-68.

柴田利男　1999　幼児の社会的問題解決に及ぼす対人情報の効果　日本心理学会第63回大会大会発表論文集, 947.

柴田利男　2004　幼児の被害場面における敵意の認知　日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 7.

Shure, M. B., Spivack, G., & Jaeger, M. 1971 Problemsolving thinking and adjustment among disadvantaged preschool children. Child Development, 42, 1791-1803.

謝　辞

本研究は2010年度卒業生田村古都美さんとの共同研究データを，本人の承諾を得て，筆者の責任においてまとめ直したものである。

またご協力いただいた北野しらかば幼稚園の大谷和彦園長先生，諸先生方ならびに園児の皆さんに心より感謝申し上げます。

[Abstract]

Preschooler's Cognition of Hostility and Social Problem-solving Strategies in Interpersonal Conflict Situations

Toshio SHIBATA

This study examined preschooler's cognition of hostility and social problem-solving strategies in interpersonal conflict situations. Fifty-nine children listened to stories in which he/she would be damaged by friends or unknown others. Children were asked 5 questions: whether the friend or other had hostility, what the emotions are that the friend or other feels, what are the emotions that he/she feels, what he/she would do for the friend or other in this situation, and how does the friend or other think he/she would react to his/her action. The results indicated that children could distinguish an unknown other from a friend and recognize the hostility of the friend or other, and that children could predict that the assertive strategies for the friend would bring a good result. These tendencies become remarkable with age.

KeyWords : Cognition of Hostility, Social Problem-solving Strategies, Preschooler